

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | ソクラテック・ダイアログの方法論：遡及的抽象…どのように哲学的認識を求め、見出すのか  |
| Author(s)    | Kopfwerk, Berlin  |
| Citation     | 臨床哲学. 2006, 7, p. 77-104  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/10345">https://hdl.handle.net/11094/10345</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ソクラテイク・ダイアローグの方法論\*

遡及的抽象 ... どのように哲学的認識を求め、見出すのか

Kopfwerk Berlin

(Jens Peter Brune, Ulrike Gromadecki, Horst Gronke, Bärbel

Jänicke, Beate Littig, Volker Rendez, Sabir Yücesoy)

樫本直樹・川上展代 訳

### イントロダクション

ソクラテスと同様に、ソクラテイク・ダイアローグの参加者は、われわれの個人的なそして職業上の生活における判断や行為の根底にある一般的な認識を追求する。プラトンによるソクラテスの対話篇が示すように、哲学的な認識への道筋を見出すことは容易ではない。というのも、哲学的な認識はわれわれに、ある意味で、日々の生活の中で実際に考えることと極めて異なるしかたで問いを問うことを要求するからである。さらに、あなたはこれらの問いに対するふさわしい答えに達するために、普通行うのとは違う仕方でも議論しなければならない。

SDの進行役を務めることは、ひとつの実践であり、そこではさまざまなダイアローグを進行する上での経験に基づくノウハウとこの経験についての方法的反省とが密接に結びついているはずである。そのような反省はSDそのものの中で起こりうる。たとえばこうしたことは、今まで全く反省されているように思われなくても、「方法的ダイアローグ」の考え方は、SDそのもののうちにあり、そして「メタダイアローグ」や「分析ダイアローグ」と類似している。

そのような「方法的ダイアローグ」とは別に、文化・哲学を牽引するグループ「コプフベルク・ベルリン」の中にあるわれわれソクラテイクチームは、異なる条件下で、多様なグループとSDを行い、その進行役として

の経験に基づいた様々なトレーニングモジュールを開発してきた。われわれは、方法論的反省をSDの内在的なプロセスから取り出して論じることにはいくつかの利点がある、と考える。すなわち、われわれは重要な側面に焦点を当てることができ、(通常とは異なって)複数の例として示された状況以上のことを考察の対象とし、さらに自由に理論的側面に貢献することができる。

この試論において、われわれは、SDにおいて中心となる方法論的要点と困難な局面についての洞察をより深めるために、方法論的反省と実践とを結びつけたい。加えて、読者が、自分のSDのトレーニングをうけた経験を発展させる機会となることを願う。以下に述べられるその基本的な考え方といくつかのエクササイズは、イギリスのパーミンガムで開かれた2002年ニューマンカレッジでの会議の方法論的ワークショップで実際に行われた。

SDのよく知られた主要な段階と局面を考慮し、われわれはまず一部において、哲学的な内容を持ち、かつわれわれの日々の生活にもかかわる最初のソクラテス的問いを見出すことを取り扱う。二部では、例を検討する局面における問題点を扱い、続く三部では、手短かに分析と判断の局面を扱う。四部において、「遡及的抽象」のプロセスの研究のために、われわれは「抽象」の異なる意味について簡潔な理論的見解を示す。そして最後に、われわれは実例のダイアログにおける抽象の方法を分析する。

## 1. ソクラティック・ダイアログにおける最初の問い

ソクラティック・ダイアログのもっとも重要な特徴のひとつは、ソクラテス的問いである。プラトンがわれわれに紹介したように、ソクラテスは、彼の対話の相手と異なり、適切な問いを立てることができた。これらは一般的なものについての問いであった。ゆえに、それらは「誰がギリシアで最も賢人か?」といったような具体的な、特定の何かについての問いではなく、「知恵とは何か」といったような人間の認識の一般的原理について

の問いであった。

それ以上に、ソクラテス的問いについては、単にこの特徴より以上ものが隠されている。それは本質的にソクラテック・ダイアローグにおける共に論じあうプロセス全体を形作っている。それゆえ、最初の問いの定式化の詳細について集中的にそして注意深く考えることはとても重要である。

第二次世界大戦後のソクラテス的方法の指導者であるグスタフ・ヘックマンは、大学のセミナーでの経験についての説明の中で、ソクラテック・ダイアローグの中で有効に取り扱われうる問いの範囲を決定した。

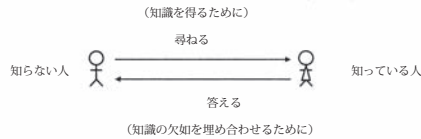
ソクラテック・ダイアローグでわれわれが対象とするのは、あらゆるダイアローグの参加者が利用できる、経験を反省するための方法である。それゆえ、それ以外の方法によって単に答えられうるような問いは除外される。そのような方法とは、1 自然や研究室の中での実験・観察・計測、2 社会科学において一般的に用いられる経験的調査、3 歴史的研究、4 人間の個人的な精神の問題を暴露しようとする精神分析的方法がそうである。私がすべての問いについて考えるかぎり、ソクラテック・ダイアローグにおいて、これら4つの方法のうちのどれにもあてはまらない問いに答えることが有効に取り扱われうるのである。(ヘックマン 1993,pp.14f)

ここで、ヘックマンはソクラテス的問いについてどちらかという消極的な定義を与えている。すなわち、彼はソクラテス的問いから除外されるものについて述べている。しかしながら、積極的な意味で、ソクラテス的な問いの形について定義することができるだろうか？ またわれわれは、なぜあるソクラテス的問いが他のそれよりよいのかについて説明を与えることが本当にできるのだろうか？ この問題を前に進めるためにわれわれが着手したのは、さまざまな問いの間にある本質的特徴を見分け、それに基づいて、適切に定式化された問いを見出すのに役立つ実践を發展させることである。

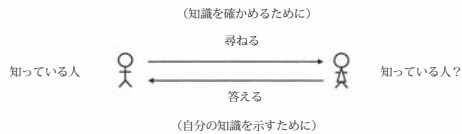
## 「知識を求める問い」と「答えのわかっている問い」

言語学的そして修辞学的研究の領域内には、さまざまな問いの形式に関する数多くの研究が存在する。とくに、カウンセリングやコンサルティングといった領域においては、問いの種類の違いがとても重要なものとしてみなされる。ソクラテス的な問いの本質となる部分を見出すという我々の目的のためには、二種類の問いの間にある根本的な違いを強調することで十分である。

もしその質問者が知識を欠いており、「問い」を尋ねる（質問する）ことによってこの欠如を埋めたいのならば、あなたはただ「問い」（質問）を口にすればいい。(cf. Seel 1983,p.241;Zaefferer 1981,p.46)



この種の「問い」についての学術的な定義は、大体においてわれわれの日常的な理解に一致している。誰かにベルリンのラジオタワーの行き方を尋ねられたら、私はその人が道を知らず、文字通りこの知らないことが原因（の一つ）となって、私にその問いを尋ねているのだ、と考える。もちろんその質問者は、私に尋ねることによって、私のことを答えを知っている人として話しかけているのだ。



知識を求める問い (knowledge seeking question) とは、ある知識を欠いた誰かがそれについて知っている人に尋ねるような問いである。

しかしながら、まさに教育の現場で、あなたは最初の問いの正反対に位置するもう一つのタイプの問いに出会う。それは一般に「試験の問い」と

して知られている。J.R. サールは、自らの言語行為論において、「純粋な問い」と「試験の問い」とを区別する。彼によれば、それらは異なるコミュニケーション機能をもつ。すなわち、純粋な問いの場合、情報を要求するのに対して、試験の問いの場合、尋ねられた人は、自らの知識を説明しなければならない。「知識を求める問い」と対照的に、試験の問いは「答えのわかっている問い」(knowing in advance question)として知られている。後者の場合、尋ねている人はコミュニケーションの相手に尋ねる情報をすでもっているし、それゆえ、出された答えの真偽を決定できるのである。答えのわかっている問いとは、自らの知識を確信している人、つまり知っている人が、対話の相手に対して彼（質問される人）が確かでない知識について尋ねるような問いである。

ソクラテス的問い：答えがわかっている問いか知識を求める問いか？

ソクラテック・ダイアログではどのような種類の問いが扱われるのだろうか？最初のソクラテス的問いは「前もって答えがわかっている」問いなのだろうか？もしそうだとすると、問いを定式化しダイアロググループに対して提示する人—普通は進行役—は、その問いに対する正しい答えをすでに知っているなければならない。彼らには自分たちが自由に扱える「前もって持っている知識」があるということになるだろう。

もし進行役によって出された最初の問いが私たちが「答えがわかっている」と呼ぶ類のものだったとしたら、そのソクラテック・ダイアログの進行役は、そのグループをその問いに対する彼／彼女自身の答えへと導いていくことができるだろう。進行役の意識の中にすでに存在している答えに向かってグループを誘導することは、学校で一方的に与える知識にしばしば代わる「尋ねながら発展させること developing by asking」と呼ばれる教育形態に一致するだろう (cf. Loska 1995, pp. 97-131)。この場合、教師の判断は間接的な影響力を持つ。教師は自分から答えを出すのではなく、念頭にある知識を基に、出された答えのうちどちらが正しくどちらが

間違っているかを決定する。それゆえに、この形の教育は、ネルズンが定式化したソクラテック・ダイアローグの本質的な条件に反するだろう。

教師の主張から生じるであろう影響は、(・・・) 無条件に排除されなければならない。もしこの影響が取り除かれなければ、全ての労力は無駄になる。その教師は生徒に既成の判断を与えるならば、その生徒が自分自身で判断する全ての可能性を奪ってしまうことになるだろう。(Nelson 1998, p.52)

もし最初の問いが「答えがわかっている」という条件に従うならば、それはソクラテック・ダイアローグの出発点にはならないことになるだろう。だからといって、進行役が以前にその内容を扱った場合に、そのことが全く無関係であるわけではない。予めそのような経験をすることは、ダイアローグの中での論証に関する可能な方法についての概観を得るという点では助けとなり、とりわけ重要な発言を見すぎさないように、あるいは重要な発言に参加者が注意を向けるのに役立つ。主題について予め取り組むことを通して、進行役はダイアローグのプロセスに集中する余裕が持てる。ヘックマンは次のように述べている。「参加者が洞察を得ようと努め、乗り越えるべき障害に立ち向かおうとし始める。ある参加者はどのように問題に取り組むのか、それは他の参加者にどのように影響するのか？」(Heckmann 1993, p.98)

SDの最初にある問いは「答えがわかっている問い」になりえない、あるいはそうあってはならないかのように思われる。最初の問いは知識を求める問いなのか？もしそうならば、誰が知識を求めているのだろうか？"主体"の選択肢は2つある。すなわちソクラテス的進行役と、ダイアローグの参加者である。もし進行役が知識を求めているならば、問いのなかに反映されている進行役の知識の欠如を補うために知識を結集させることに、グループは寄与することとなるだろう。進行役は、お互いの意見に言及しあうかどうか、参加者が一緒に前進するかどうか、出された意見が

相互にチェックされたものであるかどうかによってその寄与を判断したりはしない。つまり、彼は我々がふつうにソクラテ斯的進行役に期待すること全てを行わないだろう。彼は自分の主観的関心、すなわち知識を得ることに見合っていると考える場合にのみ、寄与に価値を置くだろう。

ふつう、ソクラテ斯的進行役は自分の問いが参加者によって直接答えられるということを期待することはできない。ソクラテ斯的問いを意味のあるものにするために参加者が知識を持っている必要はないように思われる。

しかし、我々がソクラテック・ダイアログで慣れ親しんでいるように、参加者がお互いに知識を求めることはできないのだろうか？ソクラテ斯的問いが答えがわかっている問いとして理解されるならば、できない。ダイアログに参加することで、参加者はすでに自分たちが知識を求めており、答えを知らないということを示している。それゆえ、その問いに対する答えに関する限り、彼らもまたお互いにとっての潜在的情報提供者ではない。

まとめると、ソクラテック・ダイアログにおける最初の問いは「答えがわかっている問い」でも「知識を求める問い」でもないということを強調できる。まるでソクラテ斯的問いは上で言及されたものとは全く違う種類の問いであるかのように見える。積極的にソクラテ斯的問いを決定しようとすることは、ソクラテスのアポリアに行き着くように思われる。どちらの問いの方法も決定的な答えではないが、どちらかが抜けても決定できない。

アポリアを解決するための確実な一つの方法がある。それはたいてい矛盾する思考方法によって提示される。すなわち、物事は全く異なる観点から見られると同時に、物事は前は矛盾して見えたにも関わらず一致するのである。

ソクラテ斯的問い：答えがわかっている問い、かつ、知識を求める問い

私たちがここで提示している観点の変更は、上で述べた一般化を取り下げ

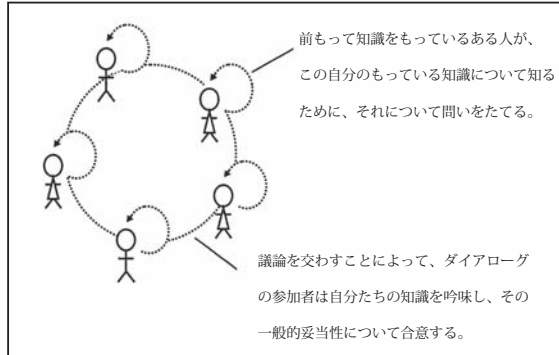


ることにある。全部の質問が「一方が尋ねて、他方が尋ねられる」というパターンで理解されるわけではない。ソクラティック・ダイアログでは、参加者は主題の真理について、自分たち自身に尋ねる。彼らは一緒に問いに対する答えとしてどちらの答え（自分たちの中に見出された答え）が妥当であるかを考える。概して言うと、ソクラテスの問いは、「汝自身を知れ！」とデルフォイの神託が言っているように、自己認識に関する問いである。進行役の仕事は、グループが自己認識を獲得していくこの企図を支援することである。

ソクラティック・ダイアログにおける問いはコミュニケーション的機能を持つだけでなく、その上に哲学的機能も持っており、同時に教育的で方法論的な意味も持っている。哲学的機能をもつということは、最初の問いが次の両方の要素、つまり、前もって知っていることと知識を求めることの両方をを含むことから明らかである。しかしこれは新しい意味においてである。

前もって知っている何かについて問いをたてることは出来るだろうか？もし我々が知識レベルの差異を考慮に入れるならば、それは可能である。ひとは何かを多かれ少なかれはっきりと知ることができる。ひとは多かれ少なかれひとの知識について確信を持つことができる。またひとは様々な程度において知識を他人と共有することができる。ソクラテス的方法によって哲学的に考えることは、不明確な（暗黙の）知識として我々の中に常に、すでにあるものに、明確な形を与えることを意味している。

つまり、最初のソクラテス的問いは、それについて知識を持っている問いである。その問いはダイアログを通じて明らかにされ、吟味されるであろう知識を前提としている。また同時にソクラテス的問いは知識を求める問いでもある。それは、暗黙のうちにあった知識を明らかにすることによって、明確で吟味された知識を探求するということを意味する。



それゆえ、最初のソクラテス的問いは、それが明確であろう不明確であろうと、私たちが利用できる暗黙の知識をすでに持っているような主題に関係づけて定式化されなければならない。ソクラテス的問いは、私たちの理性の使用を一般的に特徴づけているものについて問う。一般的認識というものがダイアローグの参加者全員に把握可能な認識であるとすれば、その場合見出された答えが潜在的に合意可能であるはずであり、そうした条件のもとでは、この問いについて得られる洞察は、唯一の現実的な洞察である。

## 2. 抽象化のプロセス

最後に、我々は論証と抽象化のプロセスについて扱いたい。このプロセスはSDにおいて中心的な要素と思われる。なぜなら、このプロセスは、第一章で扱ったようなソクラテス的問いに対する答え、哲学的洞察を得るといふSDの理念そのもの体現しているからである。以下の問いは、SDにおける抽象化のプロセスを体系的に理解するために役立つだろう。すなわち、抽象化とは何であり、何を意味しているのか？何から抽象化するのか？レオナルド・ネルズンがSDにおける抽象化プロセスとして称した「遡及的抽象」とは何か？どのようにして、我々は特定の判断から抽象的な言明

に至るのか？何によってこれらの言明を妥当なものにするのか？

抽象化とは何か？

日常言語では、我々は「抽象的な」芸術、「抽象的な」音楽や「抽象的な」科学について語る際に、「抽象的な」という語を「具体的なものとに即してはいない」あるいは「難解な」という意味で用いる。「抽象的」という形容詞を科学、発話あるいは概念に対して用いる際には、我々はしばしば（少しけなして）「単なる理論的構築物」、ひいては「非実践的で日常生活に不要なもの」という意味をこめている。しかし、これらの場合、「抽象的」は何かに帰属し、もしくはその属性と考えられている。

「抽象的」という言葉のラテン語の語源に立ち戻ってみると、「abstrahere」は何かに注意を払わないこと、つまりあることを無視することを意味するとわかる。したがって、「abstraction（抽象化）」は、多かれ少なかれ、ある物、あるいはある状況についての外延的な記述から出発した作用の結果である。

例えば、

- (1) 私は「戦争反対」と書かれた旗を持ち、オレンジ色の小さなピースボタンをつけて歩いている5億人ほどの人々を見た。→私は平和のためのデモを見た。
- (2) それは、木でできており、4本足があり、表面は座れるようになっていて背もたれのある物体である。→これは椅子である。

これらの例では、前者の言明から後者の言明への段階は、特定の物や具体的な状況の詳細は無視してそれらが共通に持つ不可欠な特徴を強調することで、物事や状況の範囲全体を包含するより一般的な考え方に導く（cf. 上の例1）。最終的に、この種の抽象化は一般的な概念やタイプ、例えば生物学的な種や物の種類に導く（cf. 例2）。このような「抽象」あるいは「抽象化」の特徴は、アリストテレス的な伝統の中で定義された言葉の哲学的

意味に接近するものである。この方法論的な考えは、その中にある一般的な洞察を得るために、そのものが持つある側面を分離することである。

では、次の例はどのように解釈できるだろうか？

(3) 友人のハンスはお金を必要としていたので、私は彼にお金を貸した。

→貧乏な状態の人は助けてあげるべきだ。

「遡及的抽象」とは何か？：理論的説明

分離あるいは一般化といった意味において、抽象化はSDのプロセスにも適用できるように思える。レオナルド・ネルズン自身、遡及的抽象について次のように述べている。

「もし（判断に対する）可能性の条件について問うならば、なされた個々の判断の基盤を構成する、より一般的な命題が問題になる。与えられた判断を分析することで、我々はそれらの前提に立ち戻る。結果から理由へと遡及的に遡るのである。この遡及において、我々は個々の判断に関わる偶発的な事実を取り除き、そしてこの分離によって、その具体例における判断の根底にある暗黙の前提を明らかにする。」(Nelson 1998 p.48)

ネルズンの説明によると、「遡及的抽象」という考えには二重の意味がある。我々はある判断のもととなっている前提を十全に導き出すために、「偶発的な事実を取り除」かなければならない。しかし、このタイプの抽象化は、判断の基礎に遡及するプロセスの中に埋め込まれており、単なる除去作用に切り縮めるわけにはいかない。今問題としているプロセスは、特に思考や議論の遂行として理解されるに違いなく、その遂行は、特定の経験に基づいた判断を出発点としている。したがって、抽象化というのは哲学的問いに答えながら「抽象的な」言明を見つけていくことを目的としている。遡及的抽象についてのより深い理論的理解を得るために、SDでの論証における「出発点」と「遡及的」の性質を明らかにするべきである。この目的のために、(1) SDの砂時計モデルと呼ばれるものに従って、ソクラテス的なプロセスをより広範囲にわたって記述する。そして、(2)

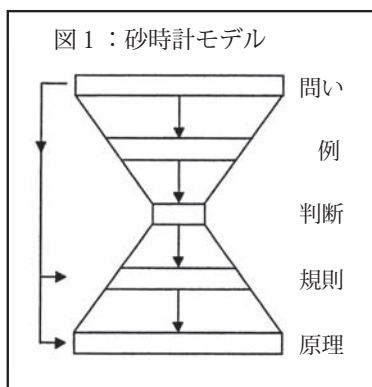
まさにそのような論拠付けという考えを、その超越論的な構造に還元する。

(1) SDの要素あるいは構造は、砂時計モデルで描くことができる。(Kessels 2001, p. 205) 一般的な問いが与えられると、我々は個々の実際の経験やその問いに関係する1つあるいはそれ以上の具体的な判断を綿密に吟味する。たいていこのような判断はある特定の誰かの判断であり、多少なりとも自然発生的なものであり、かつ例提供者の全ての意見を反映したものではない。我々は、例や判断に応じて、一步一步、合理的で一般的な洞察を得るために一緒に考えたり議論したりする。これらの洞察は日常実践すなわち決断や行動が基づく様々な規則や価値によって成り立っている。それらは「抽象的な」言明へと定式化され、そのような言明は背後にある規則や条件、あるいは少なくとも我々が経験に基づいて判断する際の、基本的な原理、価値、態度として理解されるべきものである。遡及的抽象は、このように、具体的な判断から最初にある暗黙の前提へと逆向きに移動することを意味している。それらを明確化させることで、我々は判断に対する更に根本的な根拠を得ようとする。

砂時計モデルは5段階のプロセスについての分かりやすく思い出しやすい考え方を提供してくれる。これはSDにおいて適用される方法を前もって説明することに使われ、ダイアログの間でも方向付けの目的として役立つ。

(2) 分離する方法での抽象化とは違って、遡及的抽象は状況やできごとの記述から直接出発するのではなく、ある状況でのできごとについての判断から出発する。遡及的抽象の基本的な考え方を理解するためには、それを何か超越論的な論証だと理解

することが最も賢明であるかもしれない。カント主義者であったネルゾン



もまた、このタイプの論証を念頭においていたように思われる。このような論証は、論理的構造だけではなく遡及的な方向をも説明するような形式的な問いと答えという連続において描写される。砂時計モデルに関する限り、この問いと答えという連続は最初に狭いくびれ（「判断」）から出発し、そして土台（「原理」）に向かうことである。

#### 形式的な問いと答えの連続

1. 判断：その状況 S に直面して具体的な経験に基づいた判断 J が P ということ（ある決定や行動は正しい、など）を意味する。
2. 問い：状況 S における経験に基づく判断 J はどのような事情や規則に基づいているか？  
答え：P ということを意味する経験に基づいた判断 J は、状況 S における規則 R に基づいている。  
言い換え：判断 J は状況 S における規則 R の正しい適用の結果である。
3. 問い：状況 S における規則 R（の適用）を支持する根拠となる原理（や価値）があるか？  
答え：原理 P（価値 V）は状況 S における規則 R を適切な／正しい規則として採用する根拠となる。  
言い換え：“判断 J は状況 S において規則 R を正しく採用した結果である”という主張は正しい。なぜなら状況 S における規則 R を支持する原理 P（価値 V）があるからである。
4. 追加：経験に基づいた判断 J を受け入れる人は誰でも、原理 P（価値 V）を受け入れる。なぜなら P(V) は規則 R の根拠であり、R を S において正しく採用するのは J に繋がるからだ。

#### ダイアローグの例

1. 天国の入り口で私は St.Peter に中に入れてくれるよう頼んだ。彼は私が生前何か善いことをしたかどうかを尋ねた。「もちろん！例えば、最近私はハンスが緊急に必要と言うので 400 ユーロを貸しました。実はそのお金は休暇のために貯めていたものでした。」と答えた。
2. St.Peter 「それはすばらしい！しかしもっと注意深く考えてみよう。なぜハンスにお金を貸すことが善いことだと思ったのですか？」私：「彼の置かれた悪状況を考えるとお金を貸すことは善いことです。友達がトラブルに陥っていたら助けるべきだからです。」
3. St.peter 「何かを放棄することになろうとも友達がトラブルに陥っていたら助けるべき、という以上に重要な理由はないですか？」私「もしそれが自分自身の楽しみを犠牲にするだけのものなら、友達のためだけではなくトラブルに陥っている人のためにも助けるべきです。」
4. St.Peter 「もしハンスにお金を貸したのはあなたのお手柄だという意見が我々が持つならば、トラブルの場合には必ず助けることが自分の楽しみよりも根本的に重要であると言わなければなりません。」

もしこの一連の過程において、最初の具体的な状況 S が結論に至るまでのあらゆるところで考慮に入れられるならば、個人的経験との関連もそのプロセスを通して維持されることになる。遡及的抽象のこの重要な側面は、

SDの一連の形式的手続きの構造そのものによって確かなものとなっている。この構造は、経験に基づいた根本的原理を「再構築」するための構造的な骨組みとして利用される。

実際のSDにおいて、判断は単に仮説的に選ばれるのではなく、むしろディスカッションのなかで一定の妥当性（できれば積極的な妥当性）のあるものとして扱われる。参加者全員が一定の妥当性（そのSDにおいても可能ならば全参加者に受け入れられる妥当性）をこの判断に帰属させるということを考えるならば、“何が抽象的言明を妥当とするのか？”という最初の問いは、かなり問題であることがわかる。ここでの盲点は次のような事実にある。つまり、最初にある、経験に基づいた最初の判断の妥当性が、形式的な遡及的過程のなかで分析されていないままであるという事実、そして原理の妥当性が遡及的抽象を通じて行われる論証だけによる経験的判断の妥当性に関係しているという事実である。ネルズンはこの問題にしっかりと気づいていた。（推測に基づくにすぎない）遡及的抽象の結果の地位を明確化するために、彼は—根拠のない出発点を考えながら—次のように問う。「もしこれらのデータ（前述のプロセスの（1）にあたる；著者注）が疑わしいものになったら、我々は何をするべきなのか？妥当性という観点から見ると、それらは原理に依存し、原理に起因する。しかし、議論されるのはまさにその原理であり、そしてその原理の妥当性なのである。」（Nelson 1970, pp.19 f./translated by the authors）個人的な経験との関連は遡及的抽象の方法によって得られるが、この抽象化の結果は必ずしも妥当なものである必要はない。

たしかに、この問題に対してネルズンは解決策を提案した。彼によると、以上のようにして認識に向かう努力は、具体的な判断（正当化された主張）を目指すべきではなく、直接的認識を目指すべきである。直接的認識は—一つの心理学的事実として—以上のような理由の探求、および推論的思考一般に伴ないうる短所を免れているのである（cf. Nelson 1970, pp.23 f.; Nelson 1973, pp. 459-483）。しかし彼の提案は、議論それ自体を単なる発見の予備的手段にしてしまう。我々は、これを受け入れ可能な解決策とは

見なさず、代わりに以下で他の解決策を主張するつもりである。

事実なされる対話の中で遡及的抽象のプロセスはどのように説明されるか？

これらの抽象的な考察は、遡及的抽象を理論的な次元で理解するのに必要であるけれども、後回しにしておき、今はSDの実践的な面に焦点を当てて考えることにする。遡及的抽象の観点から実際の議論を理解し分析することは、ソクラテス的進行役あるいはそれを目指す人たちにとっては不可欠であるように思われる。このことは、ソクラテック・ダイアローグを導く上で不可欠の鍵であると考えられている。参加者にとっても、ダイアローグの最後で—例えば自分たちのダイアローグについて分析的な議論をすることによって—その議論のプロセスを振り返ることは有益であろうし、もし必要ならば、生じうる矛盾点や不確かな点を明確化することができるだろう。

遡及的抽象を用いる全てのSDでは、個々のプロセスについてのいくつかの事前の知識が間違いなく要求される。しかし、この知識がより強調されればされるほど、実際のSDが理論と"一致"しないという事態が頻繁に起こりうる。議論を十分深めるには時間が足りないこと、あるいはグループがその例の段階（例となる個人的経験について情報を集め、選択し、定式化すること）を他のものよりも優先するゆえに、論拠付けよりも起こったことの現象面に焦点を当ててしまうことがしばしば見られる。明確で具体的な判断を取り出すことが困難な場合もある。このような場合、後に行われる分析のための（適切な）材料が出てくることはないだろう。しかし、たとえ十分な材料があっても、体系的な構造は滅多に明快にはならないし、そこでできる遡及的議論も即時に目に見えることは滅多にない。議論が様々な方向に枝分かれする中で、あるいは抽象化の各段階において、論拠付けの方向が複数考えられることもあるが、それらのうちいくつかは、一旦取り下げられ、後でもう一度取り上げられる。従って、実際のSDがもつ複雑な性質という点から見ると、次の分析は、SDのプロセスを無理



やり論理的な外見をもつ構造に組み込むというよりむしろ、ダイアローグの論理的な結果についての洞察を得るのに使われるべきである。

我々はSDをトレーニングするグループが遡及的抽象のプロセスを理解するための3つの方法を紹介したい。これらはすべてソクラテス的方法、すなわち個人的経験に基づく方法に適している。最後の形は、詳細に議論されるだろう。

(1) グループで様々なダイアローグの記録から個々の議論の結果や段階を見て、それぞれのケースにおいてどのような抽象化が使われているかを見出すことができる。このような分析的な議論に参加者は、SDの複数のセッションを共に経験しており、SDについての広範囲にわたる実践的な経験を持っており、SDに利用可能な"材料"を選んで吟味する仕方を知っていることが望ましい。例となる問いを選ぶ人—たいていこのワークショップの進行役—は"スポットをあてられる"べき抽象化の種類や範囲を決定してもよい。この形においては、進行役が前もって持っている(遡及的)抽象についての知識がグループワークに大きな影響を及ぼす。

(2) 進行役がサポートすることによって、SDを行ったグループが遡及的抽象に焦点を当てることもできる。グループは自分たちがし終えたダイアローグ全体を振り返って、遡及的抽象が用いられているかどうか、どのように用いられているのかを見いだすことができる。これは次の2つの方法で可能である：

(2a) グループのうちでダイアローグを分析するメンバーがそのダイアローグの最初に参加していたら、確かによりわかりやすくなる。残念ながら、この試みはどちらかというと時間を食うし冒険的である。経験的に言って、抽象の段階にまで議論が至るには長い時間がかかるし、一つの原理にすら到達しない議論がほとんどだからである。その上、SDが本当に十分な結果をもつのかどうかや、分析に適した材料を提供できるかどうかについては、何の保証もない。

(2b) もし十分な時間がない、もしくは分析に適した材料を得られないと

いう危険性が高ければ、議論の記録に基づいて分析をすることもできる。そのような方法として可能なものを、以下に紹介する。

#### 実践における遡及的抽象：実例

以下に述べられるSDは、ウィーンの大学で開かれた環境社会学についての大学セミナー（2001年）の一部である。リスク論以外には、リスク社会と科学技術研究、持続可能な開発の基礎理念がその科目で扱われた。そのSDのねらいは、学生たちにこれらのテーマを扱うなかで問題となる論点について、体系的にそして着実に、論拠づけを組み立てていくことによって、議論の認識能力を向上するための機会を与えることであった。それに加えて、そのSDは、哲学の専門家でない人たち、例えば専門的な哲学の訓練を受けていない人々や哲学の学位をもたない人々と共に、持続可能な開発の倫理的意味について研究する方法として提供された。6人の学生とソクラテス的進行役がそのダイアログに参加した。そのSDは全部で9時間（それぞれ3時間のセッションを三回）続いた。それ以前にSDに参加したことのある参加者はいなかった。学生たちが選んだ問いは、「いかなる条件のもとで、個人的利益が集団的リスクをおかすことを正当化しうるか？」であった。いつものように、そのダイアログは参加者自身の経験に基づく個人的な例から始まった。状況が明確であり、誰にでも理解できるという大きくふたつの理由でポールの例が選ばれた。従って、参加者はみな、例提供者の状況を容易に想像することができた。

S Dの記録：いかなる条件のもとで、個人的利益が集団的リスクをおかすことを正当化しうるか？

ポールの例：昨日は寒い日だった。私は家から歩いて5分ほどのところに停めてある車に息子Jを連れて行った。私たちは妻ともう一人の息子Lを家に迎えに行った。息子Lは吸器系に軽い病気を患っており、風邪を引かないようにすることが望ましい。私たちは幼稚園まで約500メートル車を走らせた。われわれは幼稚園で子どもたちをおろした後、妻と私は700メートル離れた駐車場まで運転し、通勤するために公共の電車にのった。そうすることによって、(歩くのに比べて)15分の節約になった。

そのグループは問いの範囲を考慮し、次の点に集中することを決めた。> 判断bとcに基づく、ポールが自身の行為から得た快適さは、大気汚染を引き起こすことを正当化するのか？

マリー：快適さは、ある状況下(例えば、とても寒いとか、あるいは「真の意味での」強いストレスが存在する、など)でのみ、ポールの運転によって生じる大気汚染を正当化する。

ポール：快適さは、すでに存在する大気汚染がある水準に達するまでは車の使用を正当化する。

マリー：この状況での車の使用が引き起こすダメージは、快適さを正当化するには大きすぎる。

<そのセッションの最後で、グループがこの議論を要約し、二つの異なる立場が作り上げられた。>：

立場A：この最初の立場の代表者として、マリーは厳密に環境的観点からその間いを見る。環境のダメージを避けることはこの観点から非常に価値がある。原則として、個人的な行為はこの目的に向けられるべきである。ごく少数の例外的な場合にのみ環境のダメージは受け入れることができる。

立場B：二番目の立場を代表するポールは、個人的な利益(快適さ、健康、時間の節約)を達成することは、原則として正当化される。それは引き起こされる環境汚染があるレベル以上になる場合にのみ制限されるべきである。

<これら二つの立場は、健康の問題に焦点をあてた次のセッションでも示された。(興味深いことに、立場Aはグループのうち自分自身子どもを持たない人々によって擁護され、立場Bは親の立場にある人々によって擁護された)このセッションにおいて、ダイアログは次の問いに移った。>

<参加者達はこの行為に関係する個人的な利益と、集団的リスクを選びだした。>

| 個人的な利益  | 集団的リスク |
|---------|--------|
| 快適さ     | 大気汚染   |
| 時間の節約   |        |
| 風邪を引かない |        |

- ・ 判断dに基づいて、子どもの健康は大気汚染を引き起こすことを正当化するのか？
- 〈そのセッションの終わりで、ポールは「深刻なリスク」と「単なる漠然としたリスク」の違いがあるということを言った。この区別は彼を次の言明に導いた。〉：
- マリー：子どもの健康は、例外的な場合、例えば、実際に天候がとても寒い場合や子どもが風邪をひく見込みが高い場合にのみ大気汚染を正当化する。
- ポール：子どもの健康に対する深刻なリスクは車の運転を正当化する。
- ハーバート：車の運転は、短期的にみても長期的にみても、人の健康によくはないからという理由で、子どもの健康は車の使用を正当化しない。
- 〈最後に、彼はここから一般的に支持されるような観点を明確化しようとした〉：
- ・ 誰かの健康に対する深刻なリスクは、車の運転によって生じる大気汚染のようなはっきりしない集合的リスクを伴う個人的な行為を正当化する。

## 二つの可能な実践

この種のダイアログが、SDをトレーニングするグループによって、避及的抽象の観点から分析されなければならない、と仮定しよう。このことはどのようになされるのだろうか。

### 1. 自由形式のエクササイズ

自由形式のエクササイズにおいて、そのグループは分析を必要とする例となるダイアログについて次のような問いをあげた。

- ・ われわれはその記録にどの段階の抽象を見出すのか
- ・ 何からその言明を抽象するのか
- ・ どんな方法でその言明を抽象するのか

この種の実践はソクラテス的方法論についてのバーミンガムでのワークショップで実施された。このケースにおいて、そのグループは例となるダイアログの異なる段階に、多くの異なる抽象を見出した。：

- (1) その例におけるとても特殊な事実から、その判断におけるより一般的な記述に至る
- (2) その例における事実から、その判断における事実の解釈（意味づけそ

して評価)に至る

(3) 個人的なレベル(「車を運転すること」「快適さ」「個人的利益」)についての言明から集団的なレベル(「大気汚染」「環境に与える損害」「環境に与える損害の回避」)についての言明に至る

(4) 特殊な判断から基本的な理由や規則、そして原理に至る

しかしながら、これらの段階の抽象化についての考えを特徴づけること、あるいはそうした考えを獲得することさえかなりの困難を生むかもしれない。われわれのケースにおいて、そのグループは、どの形の抽象化は、その核心的な意味で、遡及的抽象のプロセスの部分ではないということに同意した。けれども、それらは例の局面において、そして具体的な判断を定式化することにおいて重要な部分である。結局、そのグループはより深い分析へ導くいくつかの重要な問いを提起した。例えば、

- ・「一般的な」判断と「普遍的な」判断の違いは何か？
- ・抽象化のプロセスにおける「合意」の意味と機能は何か？

両方の問いは密接に関係する。それらの問いは遡及的抽象の考えを一層明確にするのに役立つ。もしある判断が、「特殊的」に対立するものとして「一般的」と考えられるならば、この判断はその例の状況に当てはめられるだけでなく、多くの他の(似た)状況にも当てはめられると考えてよい。このことは、規則という言葉を用いて、「一般的規則」はあるタイプの状況すべてに適用可能であると言い表すこともできる。様々な程度の「一般的」ということがありうるということ、すなわち、ある判断は多かれ少なかれ他の判断より「一般的」でありうるということを考慮するならば、われわれは今、遡及的抽象のプロセスの一つの側面を再構成することができる。すなわち、上述した遡及的構造によれば、論拠づけはソクラテス的問いのような一般化された問いをめざして、より「一般的な」判断へと一步一步さかのぼる。「一般的」ということについてはここまでしよう。

他方で、ある判断が「普遍的」であるという主張においては、その判断

の妥当性が問題になっている。ある判断は、それが「一般的」か「特殊的」かどうかにかかわらず、「普遍的」であると考えられる。すなわち、とても特殊な判断でさえ普遍的な主張を含むかもしれない。ある主張が正当化されるかどうかを決定するために、われわれはまず、SDにおいてその判断がどのように理解されるべきかということについて事実として合意に至らなければならない、それからその合意に対する理由を吟味し、それが正当化される理由（例えば、ある規則のために）を見出すのである。その次の段階において、前述の「合意」は承認機能をもつだろう。すなわち、SDで得られた理由の妥当性に関する事実に基づく同意は、それが取り消されるまで、この理由を残りの議論にとって当然のもののみならず承認をわれわれに与えるのだ。従って、事実に基づく合意の承認機能はまた、SDの構成要素であると考えられるもの、すなわちあらゆる参加者は、経験的で妥当な洞察を得る機会をもつことができるはずであるという主張を支持する。

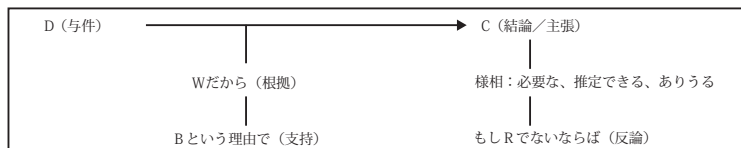
しかし、この点で、われわれは、抽象の結果が妥当しうののかどうか、そしてどの程度それが妥当するのかという問いをすでに提起していたネルゾンと同様の問題に直面している。実際に得られた合意が絶対的な妥当性を保証できないということは明らかである。しかし、直接的な認識を優先して批判的検討を行うという理念をいったん保留したり、議論の重要性を低く見積もるのではなく、われわれは事実なされるSDのもつ時間的人格的な次元を超えて、それを精神的に拡張しなければならない。実際、われわれは予想される全ての反論が、いまここで事実としてなされた合意に対して吟味されるような際限のないSDを想像しなければならない。このことは決して議論するという理念をしりぞけるものではなく、長期の展望にたてば、むしろそれを適切な理由の欠如をなくすための唯一の意味ある方法として提案するものである。さらに、「同意」は、可能な理由の全領域を、あらゆる人々によって自由に受け入れられるただ一つの領域に狭めることができるために必要である。結局、それはまた統制的理念（カント）の機能をもつのである。

にもかかわらず、長い目で見れば絶対的に妥当な洞察は得られるかもしれないけれども、ほとんどの場合、それらが直ちに利用可能になるとは思われぬ。しかし、これは本当だろうか？このことはSDの本質的主張にもあてはまりうるのか？SDのトレーニングを行うグループと／あるいはSDグループは、このことを過去の経験よりも現在の状況を出発点として使う反省的対話テストによって調べることができる。この場合、ある参加者は自分自身に次のように問いかける。『SDの一参加者として自分は、「私はそこには少しも妥当な洞察がないと考える」と矛盾なくみなすassumeことができるか』と。この問いかけの例によって以下のことが明らかになる。それは、この参加者の問いがどのように受け入れられるかに疑問を差し挟むことは意味がないということである。なぜなら、何かを何かだとみなすというまさにその行為において、この「私」なるものは、すでに「私」がそうみなしている内容（つまり「そこには洞察がない」という漠然とした疑念）がすでに洞察であるという事実をみとめているからである。言い換えると、だれもが皆、妥当な洞察がSDにおいて獲得されるということ（アプリオリな合意）を事前に同意する必要があるということである。

## 2. 論証のトゥールミンモデルに基づく分析

『論証の使用』'The Uses of Argument'(1958,pp.94ff.,esp.pp.101ff)において、ステファン・トゥールミンはとりわけ実践的な会話に適用でき、そして議論を構築することと推論を理解することが容易になるような論証の分析を展開した。

### ステファン トゥールミンの論拠づけモデル



砂時計モデルにおける異なる段階と論拠づけの体系の主要な側面とを大枠で比較すると、両方のモデルが使用している各要素は本質的に同じ機能を持っていることがわかる。:

| 砂時計モデル | 論拠づけの体系の要素  |
|--------|-------------|
| 問い     | —           |
| 例      | 与件          |
| 判断     | 結論（主張）      |
| 規則     | Wだから（根拠）    |
| 原理     | Bという理由で（支持） |

実際になされるSDが、多かれ少なかれ経験された状況についての詳細な記述を行うのとは対照的に、ツールミンの体系は判断（「与件」）に関連する諸事実のみ集中する。

ツールミンモデルにおいては、たとえそれが経験の一部をなしていたとしても判断について影響を持たない詳細や状況は無視されるゆえに、それらの諸事実というのは文脈から切り離され、抽象化された結果として理解される。一方SDにおいて、これらの諸事実は、例を詳細に記述するための5つの段階に従うことによって、大きな回り道をすることなく獲得されることができる。（参考：コプフベルク 2004,p.163）

発見ツールとして使用されるツールミンの体系は、それが方法の多様性や例外的な状況をも考慮に入れることができ、個々の論証の詳細な構造をより巧みに表せるという理由で、砂時計モデルよりもダイアログを分析するのによりふさわしいように思われる。

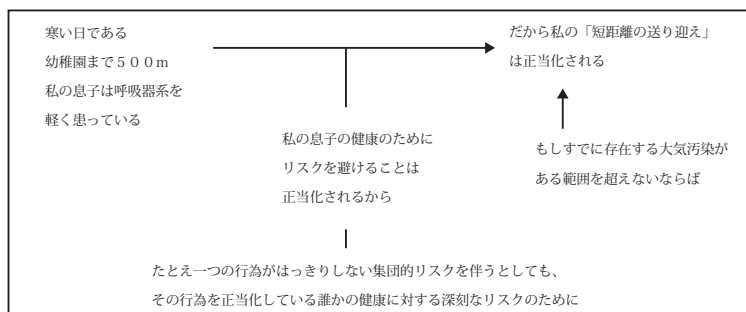
さて、ダイアログの記録を、とりわけ「いかなる条件のもとで、個人的利益が集団的リスクをおかすことを正当化しうるか？」という問いを、より詳細に検討してみよう。自明の理由 (a) から (d) までを含めて、例提供者の行為についての判断はかなり詳しく述べられていた。それゆえ、そのグループはこの文脈において、快適さが得られるということと時間が節約できるという利益から出発し、それから健康問題について議論することを決めた。ダイアログを通じてグループは二つの立場に分かれた。環境の保護に重きをおく論拠づけを行うグループ（立場A）と、他方より人間的な側面に焦点をあて、プラグマティックな方向で論拠づけを行うグルー



ブ（立場 B）である。異なるスタート地点にもかかわらず、双方の立場は、一方で環境保護の必要性を、他方で実践的な制約への考慮を認めた。残念なことに、許容できる環境ダメージと／あるいは日々の生活上の制約の程度についてはさらにつっこんで議論できなかった。最後の段階で、論拠づけの異なる傾向は、セミナーの最初に与えられた他の例にもあてはめられた。

個々の論証を読み解くために、SD のトレーニンググループは、ツールミンの体系を効果的に使用することができる。例えば、われわれが例提供者の立場でもある立場 B を選び、それを彼の体系の構造にあてはめるならば、われわれは（それぞれの推論を強調した）次のような図に至るかもしれない。

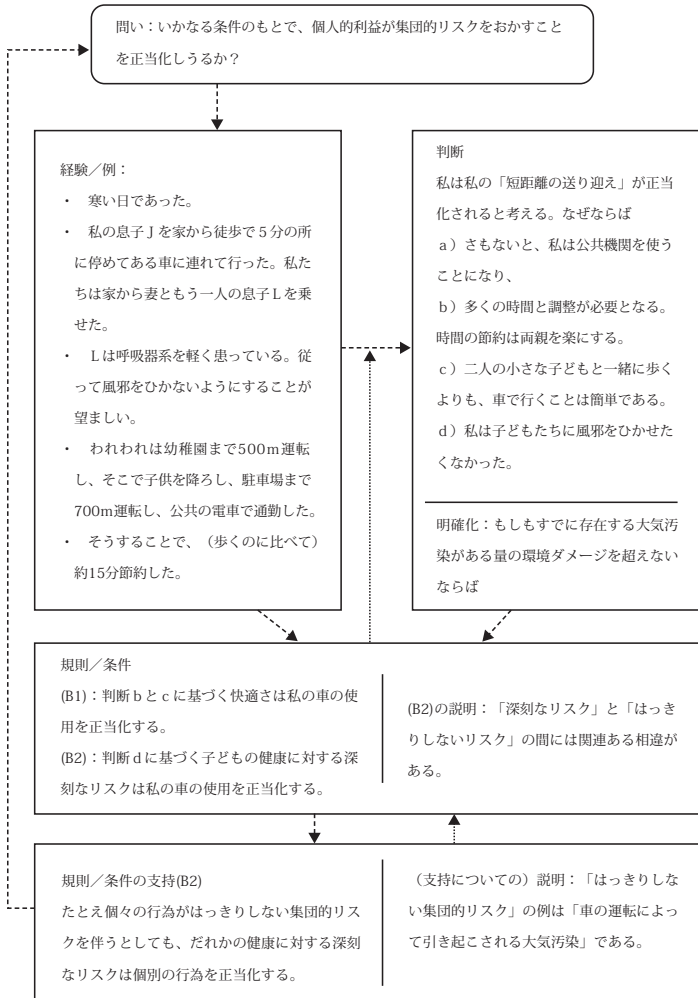
図 1：立場 B



## 遡及的抽象の二重構造モデル

われわれのダイアログの例の過程で行われている遡及のプロセスをよりよく理解するために、ツールミンの論証モデルはいくぶん拡張されなければならない。この拡張が必要なのは、この体系を狭く解釈してしまうと、様々な種類の説明を考慮に入れることができなくなる（それらの説明は SD における議論にとって不可欠なのであるが）からである。

図 2：二重構造モデル（立場 B）



二重構造モデル（図 2）は、ソクラテス的問いや重要な説明のための場所を空けるだけでなく、遡及的抽象のプロセスが二つの反対の方向に分かれるということも示す。すなわち、一方は（太い破線 ---）、参加者が判断の

妥当性に関する先行要件（規則、原理、そして／あるいは正当な理由、支持）を見つけようとする、S Dの着実な進展を示している。もう一方の方向（細い破線...）、つまり規則についての支持から規則それ自体、そして判断へさかのぼる方においては、これらの先行要件は最初の判断のための理由として役立つのである。

どのように終わるのか？

バーミンガムでのニューマン会議 2002 のワークショップでとても重要な問いが出された。それは「どのようにダイアローグをうまく終わるのか」というものである。こうした問いに対しては、次のように応じて我々のエッセイを締めくくることがよいのかもしれない。それは読者のみなさんへの問いかけで終わることである。ここで、われわれはどんな種類の知識を獲得したのでしょうか？それらの洞察はわれわれの人生や（ソクラテス的）作業に関連を持っているのでしょうか？他にどんな種類の問いが思い浮かびますか？われわれが考慮すべき他の重要な方法論的側面はあるのでしょうか？こうしてダイアローグは続いていくのである。

コプフベルク・ベルリンのダイアローグのグループは、みなさんがソクラテック・ダイアローグの方法論について継続して行われている作業に加わってくださることを暖かく歓迎します。どうかわれわれに意見を求め、あなたの問い、示唆、提案、考えを送ってください。

Socratic-methodology@Kopfwerk-Berlin.de

\* The Methodology of Socratic Dialogue

—— Regressive Abstraction —— How to ask and find philosophical knowledge, in Jens Peter Brune, Dieter Krohn(ed.) *Socratic Dialogue and Ethics*, LIT Verlag Münster, 2005, p.88 - p.111.

## 参考文献

- Holzkamp, Klaus (1994): Am Problem vorbei — Zusammenhangsblindheit der Variablenpsychologie. In: Forum Kritische Psychologie 34, pp. 80-94.
- Hundsnurscher, Franz (1975): Semantik der Fragen. In: Zeitschrift für germanistische Linguistik (ZGL) 3, pp. 1-14.
- Gronke, Horst; Stry, Joachim(1998): Sapere aude! Das Neosokratische Gespräch als Chance für die universitäre Kommunikationskultur. In: Handbuch Hochschullehre, Informationen und Handreichungen aus der Praxis für die Hochschullehre. Loseblattsammlung. Bonn: Raabe-Verlag, 19. Ergänzungslieferung, Chap. A. 2. 11, pp. 1-34.
- Heinen-Tenrich, Jürgen; Horster, Detlef ; Krohn, Dieter (eds.)(1989): Das Sokratische Gespräch. Ein Symposium. Hamburg: Junius.
- Kassels, Jos (1997): Socrates op de markt. Filosofie in bedrijf. Boom: Meppel / Amsterdam.
- Kopferwerk (2004): The Methodology of Socratic Dialogue: Creating Socratic Questions and the Importance of Being Specific. In: P. Shipley; H. Mason (eds.): Ethics and Socratic Dialogue in Civil Society. Series on Socratic Philosophizing. Vol. XI, London / Münster: Lit, pp. 148-168.
- Loska, Rainer (1995): Lehren ohne Belehrung. Bad Heilbrunn: Klinkhardt.
- Nelson, Leonard (1970): Die Schule der kritischen Philosophie und ihre Methode. In: Gesammelte Schriften. Vol. I, ed. by P. Bernay, W. Eichler, A. Gysin, Hamburg: Meiner.
- Nelson, Leonard (1973): Geschichte und Kritik der Erkenntnistheorie In: Gesammelte Schriften. Vol. II, ed. by P. Bernay, W. Eichler, A. Gysin, Hamburg: Meiner.
- Nelson, Leonard (1998): The Socratic Method. In: P. Shipley (ed.): Occasional Working Papers in Ethics and the Critical Philosophy.Vol.1, London: The Society for the Furtherance of the Critical Philosophy, pp. 42-62.

- Schwarzbach(1985): Problem und Problemverhalten. In: Gorny, E.; Falkenhagen, H.; Knopf, H. (eds.): Theoretische und empirische Untersuchungen zum Frage- und Kontrollverhalten in der Lerntätigkeit. Halle-Wittenberg.
- Searle, John Roger(1969): Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language. Cambridge: University Press.
- Seel, Norbert M. (1983): Fragenstellen und kognitive Strukturierung. In: Psychologie in Erziehung und Unterricht 30, pp. 241-252.
- Toulmin, Stephen(1958): The Uses of Argument. Oxford University Press.
- Zaefferer, Dietmar(1981): Fragesätze und andere Formulierungen von Fragen. In Krallmann, D.; Stickel, G. (eds.): Zur Theorie der Frage. Tübingen: GNV.